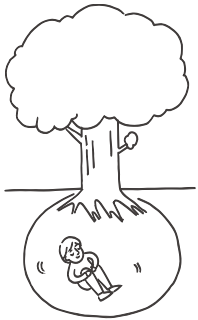


## インタビュー|富田 哲司 (No.105)

好き：美術（現代美術）



### Q.自分のベースになったと思う原体験は？

自分が欲しいおもちゃとか全然買ってもらえる家じゃなくて。だから、見たものや欲しいものは絵に描くしかなかった。

俺の家は転勤族で、転勤のたびに早く学校に溶け込みたいから、絵を描くというのを自分の売りにしてた。コミュニケーションツールだったんですよ。小学校高学年の時に、不良チームからチームのロゴを作ってくれて依頼されて描いたら仲良くなれた。色んなオーダーに応えているうちに面白くなっていった…

そんな原体験があったので、デザイン、中でもグラフィックがやりたかったんだと思う。今考えると「デザインでどういう風に人とコミュニケーションを取るか」っていうこと。それで札幌高専（現札幌市立大学）に入学して。



### Q.どこで、誰と出会う？

卒業後、海外派遣制度でロンドンに行って一年間、本当に憧れたグラフィック、ファッションや音楽とか、若い世代のカルチャーを肌で感じる事ができた。

ロンドン是人種が多様なので価値観も多様で。音楽シーンとかも個性があって。映像に興味を持ち始めたりした。



### Q.何を見た？

今でいうところのプロジェクションマッピングなんだけど、ビッグベン(ウェストミンスター宮殿の大時計)にいきなりドンッとメッセージが投影された。

### Q.どう感じた？

ショッキングでした。なんだこれはみたいなの。

物理的に何かしなくても空間に対して大きな変化をもたらすことができ、しかもみんなが見れて、パブリックスペースで、デザインとかアートとかを超えてくるもので。すごい一面面白いな—と思って。

メッセージをどういう風に人に伝えるかっていう視点で見えていたと思う。

「こういう考え方もあるんだ」とか「こういう世界観があるんだ」とか、散々体験した。



### Q.そのあとのストーリー

そんな経験から、映像企画なんかをしている会社に入って。6年くらい勤めたんだけど、満足出来なくなっていった。それは大きなクライアントワークの一部分を職人として仕事をするというところで、そのもっと前に「なぜやるのか」というところから関わらないと、自分のそのもやもやは解決しないって考えた。

自分のその問題意識とか自分の欲求みたいなものを人に伝えたい、共有したいって思うようになっていったときに、何だかわからないんだけど、作ってみたいとなったんで、サラリーマンを辞めて、現代美術家として活動した時期があった。

今は、アートコーディネーターなんかもしながら、社会的なものとして機能するアートやソーシャルエンゲージメントなんかに興味があって勉強させてもらっていて。美術館やギャラリーよりもパブリックなところが面白いと思っている。

